

生きるチャンスをありがとう

鹿屋市立高隅中学校3年 宮下 倭摩

十四年前、僕は生まれた。七ヶ月と半月、六八八グラムの超未熟児だったため、鹿児島市立病院の新生児集中治療室で育った。約七ヶ月間入院し、やっと退院できたのもつかの間、心臓が止まりそうになり、二ヶ月くらい別の病院に入院して、在宅酸素療法という治療を始めた。他にも色々と疾患があって、また成長も遅かったので、僕の乳児期は、治療や療育に通う日々だったようだ。

少し大きくなると身長がかなり小さいことから、成長ホルモンの治療を始めた。毎日打つ注射と酸素のボンベ、色々な薬に、心電計や酸素濃度計、そして吸入吸引器。僕の家はまるで病院のようだったらしい。

そんな日々を過ごし、ひとつひとつを乗り越えて、今僕は元気に暮らしている。楽しく学校に通い、友達と将来の話もする。まだ低い身長が伸びる可能性は、もうないみたいだから、少しだけ悲しいけれど。今日もここにしっかりと生きている。しかし、僕がここまで育つのに、多額のお金がかかったと母から聞いた。それは、僕が一生かかっても返せない、驚くほどの額だ。そのお金を、全額払わなければ治療が出来ないとしたら、ここまで育てることはできなかったと思う、と母は言う。僕はここに生きていなかったかもしれないのだ。そんな親に代わって、僕の治療費を負担してくれたもの、それは税金だ。だから時々僕たちきょうだいのことを語る講演をしてきた母は、治療費がみんなの税金から支払われたことを伝え、講演の最後に必ずこう話す。

「子供に生きるチャンスを、私に我が子を抱ける幸せをいただき、心から感謝しています。ありがとうございました。」

と。沢山の人の「頑張れ」が入っている僕の命。感謝の気持ちを持って、大切に生きたい。そして僕が将来支払う税金は、命への恩返しだ。僕も誰かの命を助け、誰かの家族を幸せにすることができる。ひとりひとりが、見えない応援でつながっているこの国に僕は生まれて幸せだ。